
羊がむすんだ恋物語

いぶんいぶんいぶん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羊がむすんだ恋物語

【Nコード】

N5411P

【作者名】

ぶんぶんぶん

【あらすじ】

嫁き遅れの第一王女が嫁いだのは隣国の無口王。なぜ自分なのかと訝りつつも臨んだ結婚式。ただ、この国では花嫁にはある儀式が課されるらしく…？

恋物語 前編

室内にはひと組の男女がとても広いテーブルに隣り合って座っていた。

室内には豪華なタペストリーや女性が好みそうな繊細なつくりのチエストが十分な間隔を持って配置され、ところどころには淡い色合いの花々が計算されたバランスで飾られている。

その中で二人の目の前にあるテーブルは、その色合いや端々の彫刻からも上質な物ということがすぐ分かるものだったが、その部屋の雰囲気と少しそぐわないと見るものに感じさせる。

その室内の中で小さなため息をついたのは、女であった。年のころは20をいくつか過ぎたあたりだろうか、背中の中ほどまである灰色のようなクリーム色のような髪はふわふわと落ち着きがない。今は純白の衣装の長い裾を端によけつつ、椅子に腰かけ何か作業をしている。はつきりは分らないが、体つきはすらりとしているようだ。

椅子から体を動かさず、手先の動きだけで何か行っているが、その目は手先ではなく何もない壁の方向を見ている。

けれども不自由はないようで、その指は着々と何かを生み出し続けている。

彼女のとなり、もちろん彼女の作業の邪魔にはならないくらいには離れた所に座っていた男は、その作業の様子をじっと見つめていた。

先ほどから指の動きはとどまることを知らないようだ。
だんだんとその動きも速くなっていると周囲の人間は感じた。

同じ部屋のすみで控えている侍女らしき女性がついに彼女に何か声をかけようとした時、一心に作業をしていた女の指が止まった。

「終わりました。」

手を下ろし、今まで作っていたものを、目の前の広い机の上に積まれた、もこもこした山の天辺に付け加えた。

おそらくその山を構成している一つ一つのもこもこしたものは、彼女が今までその手で生み出していたものなのだろう。それらがバランスを崩して下に落ちてしまわないように整える彼女の指は、まるでいとしいものに触れるかのように柔らかさを感じさせた。

それまでは壁を見詰めていた瞳も、そのつみあがった山の稜線のあたりをなぞるように見ている。

そのとき、今まで彼女とその作業を一心に見ていた男が声を発した。「カリン殿、いま貴方が作ってくださった100個の羊のぬいぐるみのうち、1個を私にさずけてくだらないだろうか。」

彼女に視線を合わせ、そう真面目に言ったのは黒髪的美丈夫で、今は彼女の夫となったこの国の国王陛下である。無口らしい彼とはほぼ言葉を交わしたことがなかったので、彼がこのような長文を発したことに少々驚いた。まあ、花婿がこのような言葉を発するのは儀式の手順のひとつのことなので、言ってもらわなくては困るのだが。

夫は隣国の宮廷にまでその強さが評判となって届いた武人らしく、

鍛え上げられた体を持ち、その腰には二振りの剣を刺し、夫婦の私室としてあてがわれたこの部屋でも隙のない姿でいる。

まあ、確かにこの場所は私室ではあるが、現在はこの国に代々伝わる婚姻の儀式の真つ最中であるし、周囲にも多くの人がいる状況ではあるのだが。

カリンはその台詞の内容とつい先ほど夫となった男性の外見がそぐわず、内心首をかしげそうになりつつも、室内にいる神官や侍女、王太后や大臣たちの手前、真剣な態度を装いつつ、できる限り出来の良かったぬいぐるみを選ぼうとした。

山を崩さぬよう気をつけつつ、彼女が選んだのは白の体で一部頭のあたりに黒の毛糸が混じったものだった。瞳にと付けたビーズも黒で、なかなかりりしく仕上がっている。

恋物語 中編

彼女が第一王女として生まれた隣国は農業国であり、さほど広大な国土を持つわけではないが羊や牛馬の育成が盛んだった。王女でありながらも羊や牛馬、その飼育のための犬などと幼いうちから触れ合っていたカリンだが、とくに大好きな動物が羊で、物心ついたときからよく遊びともに城内を駆け回った羊のケリーが、このぬいぐるみのような毛の色だったのだ。数年前に死んでしまったが、体がとても大きく、力持ちで頼りがいのある羊だと常々感じていたものだ。

そんな懐かしさから選んだぬいぐるみを、そばで静かに待っていた夫に手渡す。

その人は彼女から両手でぬいぐるみを受け取ると、一瞬目を見開いた後、嬉しそうに口元をゆるめ、ぬいぐるみを胸元に持っていく。

その様子にカリンは

（今笑ったわよね？ぬいぐるみが好きなのかしら？確かに、儀式で王妃が縫う100の意匠を毛系のぬいぐるみにしてほしいと希望したのはそちらの国だったけれど……）

不思議に思いつつも儀式の途中だから決して顔には出さない。

その間に夫はそのぬいぐるみを抱えたまま神官らに向き直り、何らかの言葉をもらっている。

嫁いでくる花嫁に縫い物をさせ、その意匠を神殿にささげ祝福をもらうというこの国独特の伝統によって、花嫁はその意匠の出来ばえも問われる事になる。

自分は動物の世話に明け暮れて、第一王女でありながら嫁の貰い手もなく婚期を逃した身ではあるが、庶民的な生活を過ごしたおかげか、裁縫の腕には比較的自信がある。特に問題はないだろう。

（だから私にこの縁談が来たのかしら？美人で評判の上の妹や、剣術が趣味で気が合いそうな下の妹でも裁縫は結構できるから平気だったのに……）

そんなことを考えているうちに儀式は滞りなく終了したらしい。神官らは神殿に事の次第を報告しに行くようで、侍女たちはその案内のため退出していた。残ったのは彼女と夫と3人の大臣、夫の母である王太后である。

今日の行事は先ほどの儀式で終了だったはずなのに、大臣や王太后がまだ室内にいたことが不思議だった。しかも4人はなぜか穏やかな笑みを浮かべてこちらを見ている。

判断を仰ぐと夫となった人を見ると、こちらはなぜか真っ赤な顔をして彼女を見ている。何かを言おうとしてはやめ、言おうとしてはやめ、口は頼りなく開閉している。

初めて見たとき、まるでケリーのような頼りがいがある方だと思ったのだが少し違ったのかもしれない。

「これを……」

何度目かの開閉をやめた後、ついに彼が言ったのはそんな台詞で、そして彼が胸元から出して私に差し出したのは、羊のぬいぐるみであつた。

ところどころ毛糸がはみ出しており、少々不格好だが、確かに羊のぬいぐるみだった。

色合いは私が彼に渡したのと似ており、白い胴体に頭が少しだけ黒かった。

私は説明してほしくて夫を見たが、無口らしい彼は何も言ってくれず、ただ私を見つめるだけだ。

私が困惑して大臣や姑となる女性のほうを見やると、なぜか生温かい目で見返された。

そして目線でそのぬいぐるみで受け取るように言われた。

よくわからないが、乞われるままにそのぬいぐるみを受け取ると、夫はすぐくうれしそうで、私の両手をつかんで抱き寄せてくる。

驚いて離れようとしたが、夫がきつくはないけれどもそれなりの力で抱きしめてくるし、見上げた顔は満面の笑顔だしで抵抗できない。よくわからないまま放置され混乱していた私は、100個のぬいぐるみをぶっ続けで数時間作って疲れていたこともあり、夫に抱きしめられたまま意識を失ってしまった。

恋物語 後編

翌日、目覚めた私の顔の横に夫の美形な顔があつて、さらにその人に抱きしめられたまま眠ったことに気づいて悲鳴を上げた私に、かけつけた大臣や王太后——今ではお義母さまだ——が説明してくれたことによると、夫からのぬいぐるみは夫の手作りらしい。

この国では、儀式に組み込まれているわけではないが、花婿からも手製のものを花嫁に渡すと幸せな家庭を築けるといい伝えられており、貴族や王族ではあまり例がないが、この国王陛下は周囲に自分もやりたいと訴えたいらしい。

さらに、できればおそろいのものを作りたいと思い、私が羊を意匠に作ると聞いて一生懸命政務の合間を縫って練習していたらしい。陛下は剣は繊細に動かせるが、毛糸のあみ棒のような通常の針よりは何倍も太い物であっても器用に扱うことは難しく、それでもこのぬいぐるみを作るために本当に血のにじむような努力をされたそうだ。

周囲は手を出してはならないというのが伝統らしく、大臣も、お義母さまも、近衛兵も、侍女たちも引いては出入りの商人たちも温かく陛下を見守っていたらしい。

もしかして、花嫁行列のときの道行く人々の視線がやさしかったのはそのせいなのだろうか。

ちなみに、羊の毛の色は、以前私を見たときにそばにいた羊おそろくケリーだろっを参考にしたらしい。儀式で私が陛下に渡したものが同じ毛色だったのでとても感激したということだ。

なぜ数年前に死んだケリーを知っているのかと思ったら、それもお義母さまが説明してくださった。

陛下は即位前に私の母国に軍用馬を見に訪れており、そのとき、動物の世話をする私を見ていたらしい。

言葉も表情もない動物を楽しげに世話をする私をみて、興味をひかれたとのことだ。何度も訪れるうちにどうしても結婚したいと思い、声をかけようとはしたが、無口なあまり実行できず、いたしかたなく国をつうじての求婚に至ったとのことだ。今は数年越しの思いをかなえたおかげで、陛下の乳兄弟でもある一人の大臣の言葉によると、これまでも最高の機嫌とのことだ。

昨日は陛下がぬいぐるみを渡した後、無口な陛下に代わって事の次第を伝えるために彼ら4人は室内に残っていたのだが、陛下が思い余って私を抱きつぶしたのでこのような状況で説明に及んでいる、ということまで説明したあと退出していった。

うん、とりあえず陛下そろそろ離してくれないかな。

それに2匹のぬいぐるみも抱きしめたまま眠る必要はないと思うんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5411p/>

羊がむすんだ恋物語

2010年12月24日11時39分発行